

第 1 回次期水源地域交流の里づくり計画検討委員会での主な意見

1 里の案内人について

- 地域の担い手はかなり高齢化しているが、新たな里の案内人になれるような人もでてきている。リタイアして 60 台半ばから後半の人達が、新たに地元のためにすごくやってくれる動きも感じている
- 現在は、里の案内人として、何を依頼されて何を託されているのかという明確なビジョンが全くわからない。
- 里の案内人の位置づけや目的を明確にして、報酬はなくても、やりがいがあることが見えることが大切。それがなければ機能しない。
- 色々な専門家というのが本来の里の案内人であって、都市地域住民とのコーディネーターはまた別の方がいるほうがスマートな流れではないか。
- 専門性のある里の案内人がたくさん居たとしても、それがどこかでつながっていないことには機能していかない。つなげるための中間組織や、里の案内人のネットワーク化が必要。

2 水源環境の理解促進について

- 下流域に対し水源環境の理解促進を図るのは非常に大切だとは思いますが、水源地域住民自体、水源環境の大切さを認識している人はほとんどいないというのが実感だ。水源地域住民に対しても自分達が水源地域を守っていくんだという意識づけ、啓発を行うことが必要である。
- 神奈川県は水源を大事にしている県なので、ここをおろそかにしてはいけないという意識を県民全体が持つようなシステム、仕組みができればいいと思う。
- 現在の上下流域自治体間交流はマンネリ化している部分もある。また、清川村にあっては自治体の負担が大きい。案では充実の方向で検討とあるが、このような点が改善されるよう見直して欲しい。

3 水源地域の活性化について

- 水源地域の活性化については実現できるかどうか少し疑問がある。「水源地域の振興」や「連携の強化」等、どういう言葉がいいかわからないが、他の言葉に置き換えたほうがいいと思う。イベント等を毎年実施し、それなりの人出はあるが、イベントをやること自体単発であり、それをやったからといって活性化ができるかということそうではない気がしている。
- 活性化というのは、1年に1回イベントを打って、そこにお金を出せば活性化になるわけではない。地道な交流が大切である。
- 活性化の中に移住促進を入れて欲しい。活性化は人がいなくなることが大きい。里が崩れる色々な理由がある中で、人がいなくなる、担い手がいなくないことの影響が大きい。ただ単なる定住者への優遇ではなく、里の案内人になれるくらいの人に来て欲しい。

4 水源地ツーリズムについて

- 水源地ツーリズムの推進という、外から人を呼んでくるということを考えがちだが、もっと近くの人を呼んだり、隣の人に遊びにきてもらうこともツーリズムである。

5 地域資源について

- 地域資源という財産を持っている県民が、これを財産と考えていないという現状がある。水源地域は県民全体の財産であるという意識付けができるような方向性を作らなければならない。
- 地域の活性化は、地道ではあるけれども、そこにある資源をそのまま生かしていく仕掛けをどれだけやるかにかかってくると思う。

6 交流拠点について

- 丹沢湖ビジターセンターが無くなったのは仕方ないが残念なこと。代替案ではないが、お土産屋とか、地域の商店に1本のぼり旗を立てて、そこにやまなみ五湖関連のパンフレットなどを置いてもらうことで、案内所の代わりにならないだろうか。実現できるのであれば、そうしたのぼり旗を立てた店が地域に複数あれば、その地域の一体感も来訪者に伝わるのではないか。
- 上流域には、体験学習の受入れを行っている教育施設もあり、小中学校の利用で賑わっている。市の施設ではあるが、今ある施設を活用して、地域内連携を図るべき。

7 やまなみグッズ・やまなみのブランド化について

- やまなみのブランドがブランドになっていない。「やまなみ」というのをこれから普及させるということも考えないといけない。地域の中では相当頑張って作られているやまなみグッズが相当あると思う。大変素晴らしいものも作っている。これをもう少しうまく流通戦略に乗せる段取りを考える必要がある。

今度は体験とか交流ができる地域であることを、やまなみのブランドとして打ち出していくことが必要ではないか。